書と詩５ー書（画、舞踊など）・歌謡・詩・言葉・音・こころー

小林一茶（１７６３～１８２７）と同時代の、主に文化文政期（１８０４～１８３０年）を中心に、江戸時代後期の書人たちを見てみよう。

良寛［１７５８（宝暦８）～１８３１（天保２）］良寛は、「日本人の原型」（唐木順三『良寛』）、と言われる。

良寛は、漢詩６００余首、和歌１４１４首、俳句１１３句ほどを残した僧侶であり、日本の詩人である。その書は日本美の至上境といわれ、空海と並び称されたりもする。

良寛は越後国出雲崎（現在の新潟県三島郡出雲崎町）で生まれた。

一茶より５歳年上、北斎より２歳年上である。

曹洞宗の僧侶。俗名は山本栄蔵（後に文孝）

字は曲。法名は良寛。諡は大愚。あだ名は「名主の昼行燈」

７人兄弟の長男、弟が３人、妹が３人いた。

父は、本姓を新木泰雄といったが、山本家（橘屋）に婿入りし、橘屋を継ぎ、山本左門泰雄となった。山本家は代々出雲崎の名主で、石井神社の神官でもあった。彼は、俳句を加藤暁台らに学び、「北越蕉風中興の棟梁」と呼ばれるほどの俳人でもあった。

俳号を**以南**といい、一茶とも交流があったという。また、国学を学び、尊王論『天真録』を残した。50歳の時、家督を次男の由之に譲り諸国を遍歴、学者らと交流した。派手好みで、奔放、トラブルメーカーの地方インテリ。

寛政７年（１７９５）良寛が38歳のとき、京都の桂川に身を投げ自殺したと伝えられる。（60歳であった）

母秀子は佐渡の相川で生まれた。山本庄兵衛の長女で、夫より先に出雲崎の橘屋に、養女としてもらわれてきていた、と伝えられるが、以南と結婚する前に、**のぶ**という名で出雲崎山本家に嫁入りし、別人と結婚していた、などという説がある。のぶは、以南と再婚して良寛を産んだという。

のぶは秀子の姉かもしれないし、良寛の母であったのかもしれないが、本当のことは分からない。秀子は、以南との間に、子を10人産んだが、３人が幼くして死んだので、４男３女の母になった。

秀子はとても信心深く、歌人の素質を持った女性であった。（秀子の妹二人も、熱烈な真言宗の信者であった）

父以南は、和歌をほとんど作っていないので、子どもたちは、みな、母の影響を受けたと言われている。書も大変上手であったという。天明３年（１７８３）49歳で死去。

少年良寛は、13歳頃から６年間、地蔵堂にある親戚の中村家の二階に下宿して、大森子陽の狭川塾（三峯館）に通い、漢詩・漢学の基礎（「四書五経」）を学んだ。15歳で元服し、山本新左衛門文孝と名乗る。

18歳の時（安永４年・１７７５）名主見習いとなり、狭川塾から実家に呼び戻された。そのころ良寛は結婚し、妻は身ごもっていたらしいが、妻の親が妊娠している娘を実家に連れ戻し、縁を切らせたと伝えられている。妻子とも、その後すぐ亡くなったらしい。名主見習いとなってから一ヶ月半余り後、良寛は、父と激しく対立し家を飛び出し、行方不明になった。

その後４年間、良寛は、あてもなく放浪したらしい。

その間、いつの頃か、出雲崎の曹洞宗の光照寺に見習い修行者として入ったらしい。見習い修行者になった理由も、想像の説ばかりで、真実は分からない。

光照寺住職の玄乗破了和尚が剃髪したという。

良寛は、家出から４年後、22歳の時、父の許しを得て、光照寺に立ち寄った、大忍国仙和尚の門弟として正式に出家、「良寛」の法号を与えられ、国仙和尚に従い、備中国（岡山県）玉島の円通寺に行き、そこで約12年間修行した。

良寛像部分　宮川禄斎筆　文政 13 年（1830）

出雲崎　前方に佐渡が見える

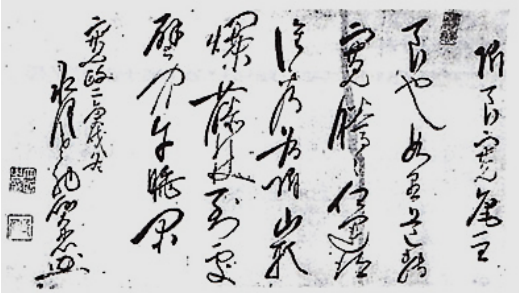
円通寺（岡山県）巨石が転がっているお寺

新しい人生の始まりに、胸躍らせてやって来た円通寺だったが、あまりにも生真面目な良寛は、友もできず、孤立した存在であったらしい。孤独な、長い、きびしい、修行であったという。

午前3時起床、午後9時就寝、1日4回の座禅と2回の講義が日課であった。その他、托鉢、作務などの修行に没頭したようである。国仙和尚からは道元の『正法眼蔵』の講義を受けた。

寛政2年（1790）良寛33歳の時、良寛は、国仙から「印可の偈」（卒業証書）を与えられた。

良寛は、この後、死ぬまでの40年間、これを大切に持ち歩いていた。良寛が死んだとき、手許に、この「印可の偈」と『法華経』一巻が残されていたという。



「印可の偈」大忍国仙和尚書

附良寛庵主

良也如愚道転寛
騰々任運得誰看
為附山形爛藤杖
到処壁間午睡閑

寛政二年庚戌冬
水月老衲仙大忍（花押）

良寛庵主に附す

良や、愚の如く、道うたた寛し
騰々として運に任す誰か看を得ん
為に附す山形爛藤の杖
到る処壁間にして午睡の閑

寛政二年庚戌冬
水月老衲仙大忍（花押）

「良寛や、お前は一見愚者のようにも見えるが、その修行の度合いは、極めて深く広いのだ。お前の何ものにもとらわれない、すべてを自然の運行に任せきっている伸びやかな心境は、誰が見抜けようか。よって山だしのままの藤の杖を記念に与えよう。これから、お前の行く先々で、たとえ昼寝をしても、それがそのまま修行となるように、ゆったりと自由自在な座禅をしなさい。」

寛政3年（1791）、良寛に「印可状」を与えた翌年、国仙和尚が急死した。良寛は円通寺を飛び出し行方不明になった。本州、四国、九州と諸国行脚をしていたようである。中国への密航説もある。6年後（寛政8年頃）郷里に戻り、寛政9年（1797）春、40歳の時、国上山の五合庵に移住した。

移住後も、あちこち転々とし、ここに定住したのは、48歳からしい。

良寛は、なぜ帰郷したのか。帰郷の前年（寛政7年）父が自殺している。

（自殺したのではなく、高野山に隠れ、寛政11年に死亡したとの説もある。）

いざここに我身は老いんあしびきの　国上の山の松の下庵　良寛
山かげの岩間をつたう苔水の　かすかに我はすみわたるかも　良寛

文化13年（1816）の冬頃、20年ほど住んだ五合庵を出て、山麓の乙子神社の草庵に移住した。

五合庵

この宮の森の木下に子どもらと　手まりつきつつ暮しぬるかな　良寛
この宮の森の木下に子どもらと　あそぶ春日は暮れずともよし　良寛

文政9年（1826）良寛69歳、独り暮らしが困難になってきたので、10年ほど暮らした乙子神社草庵を去り、島崎村の能登屋・木村家の草庵に移住した。

あしひきの　国上の山の　山かげの　森の下屋に　年重ね
わが住みにしを　からころも　立ちてし来れば　夏草の
思ひ萎えて　夕星の　か行きかく行き　その庵の
隠るるまでに　その森の　見えずなるまで　たまほこの
道の隈ごと　隈もおちず　返り見ぞする　その山のべを
（良寛の長歌「国上の山を出づるとて」）

かすみ立つ長き春日に子どもらと
手まりつきつつこの日くらしつ　良寛

乙子神社草庵（明治18年再建）

亀田鵬斎画「良寛と子どもたち」

文政10年（1827）、良寛70歳の秋、**貞心尼**（30歳）が良寛の草庵を訪れる。その後、貞心尼は、良寛の弟子となり、良寛と夜を徹して語り、良寛の死まで濃やかな世話をした。

貞心尼は、良寛との愛の記録といわれる、歌集『蓮の露』を、良寛が亡くなった4年後に書き上げた。そこには良寛の生涯、良寛の和歌、良寛との贈答歌など、良寛の思い出が書き残されている。

貞心尼はこれを、良寛亡き後、40年ものあいだ、大切に秘蔵していた。

君にかく　あひ見ることの　うれしさも
　まだ　さめやらぬ　夢かとぞ思ふ　貞心

ゆめの世に　かつまどろみて　ゆめをまた
　かたるも夢も　それがまにまに　良寛

文政11年（1828）冬、三条を震源とした大地震が起こり、何千人もの犠牲者がでた。良寛は被災した友人への見舞い状に、次のように書いている。

「・・・災難に逢う時節には災難に逢うがよく候。死ぬ時節には死ぬがよく候。是はこれ災難をのがるる妙法にて候。かしこ」

文政13年（1830）夏頃から良寛の健康が悪化。暮には危篤状態となった。

『蓮の露』に次の歌と句がある。良寛の辞世の句という説があるが、疑問！

生き死にの境離れて住む身にも　避らぬ別れのあるぞ悲しき　貞心

御かへし　うらを見せおもてを見せて散るもみじ　良寛

天保2年（1831）1月6日午後4時頃、良寛は、木村家の草庵で、弟由之、貞心尼、遍澄、木村家の人たちなどに看取られて永眠（74歳）。死因は直腸ガンと推測されている。本人は赤痢だと思っていたらしい。

形見とて　何か残さん　春は花　山ほととぎす　秋はもみじ葉　（良寛の辞世の歌）

散る桜　残る桜も　散る桜　（良寛の辞世の句と言われている句）

火葬の日、大雪の中多くの人々が（1000人以上といわれる）参列したという。人びとは良寛の骨を拾って持ち帰った。

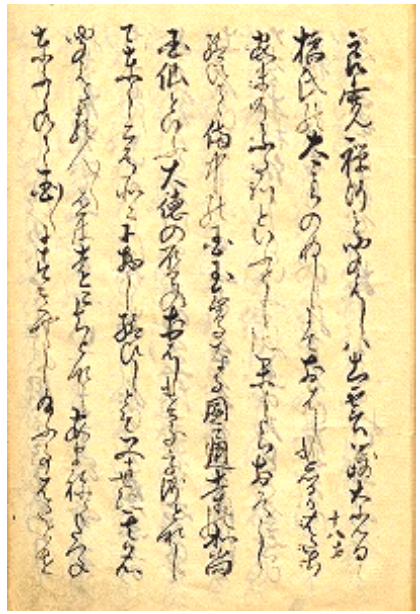
天保4年（1833）3月、木村家、由之、由之の息子の馬之助を中心に、墓碑建立の話がすすみ、募金などして、島崎村の浄土真宗・隆泉寺に良寛の墓が建った。墓碑の左側には由之が選んだ旋頭歌が、右側には、長詩「僧伽」が刻まれた。良寛には似合わない大きな墓である。

良寛の墓

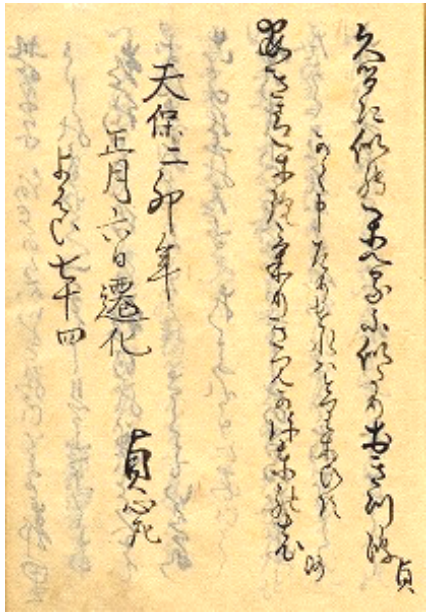
※江戸後期の三大女流歌人

加賀の千代女（1703～1775）
京都の蓮月尼（1791～1875）
越後の貞心尼（1798～1872）

旧塩入峠
良寛に逢うために、貞心尼が通った道。

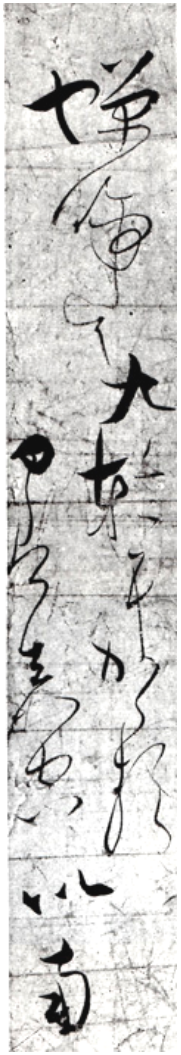


貞心尼筆『蓮の露』冒頭部



貞心尼筆『蓮の露』最終部

良寛は、父や母から、最初に書や歌の影響を受けたと思われる。山本家一族は皆、書が上手かった。父・以南は、破滅型の人間で、親戚から金を借りまくったり、公金に手をつけたりで、周囲とトラブルが絶えなかったようである。名主としての仕事を放棄して、文雅を愛し、各地を旅して歩いた。



山本以南の短冊

「蟬啼て九輪にかゝる
日は真空　以南」

以南の書は、御家流ではない。かなは秋萩帖風。光悦風か。

母・秀子は、高雅で上品な書をかく優しい人であったらしい。親不孝な良寛は、母の死に目にも会えなかった。良寛の母の短冊が良寛記念館に残されている。秀子の歌は、数首だけ残っているという。

わくらばに待ち得てあひしかひもなく　またつげゆくかこしじへの空（秀子の歌）

国仙和尚に従って故郷を離れてゆく良寛を、母ひで子は、丘に登って、わが子の姿が見えなくなるまで手を振りつづけたという。これ以後、良寛は、母に生きて会うことはなかった。

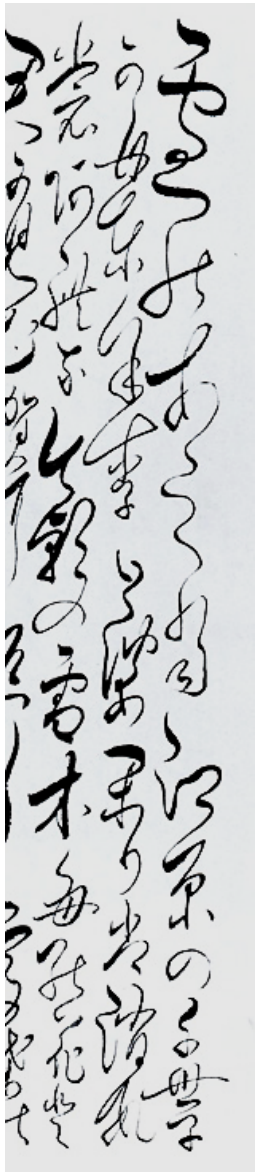
良寛が22歳の時、出家して故郷を旅立つ時に詠んだ長歌が残っている。

「・・・草まくら　旅行く時に　たらちねの　母に別れを　告げたれば　今は此世の　名残とや　思ひましけむ　涙ぐみ　手に手をとりて　わが面を　つくづくと見し　面影は　猶目の前に　あるごとし・・・」

良寛が中年になって、故郷に帰ってきてから詠んだ短歌。

たらちねの　母がかたみと　朝夕に　佐渡の島べを　うち見つるかも

良寛の弟、次男の由之（1762～1834）　良寛より4歳年下。25歳の時、橘屋を継いだ。

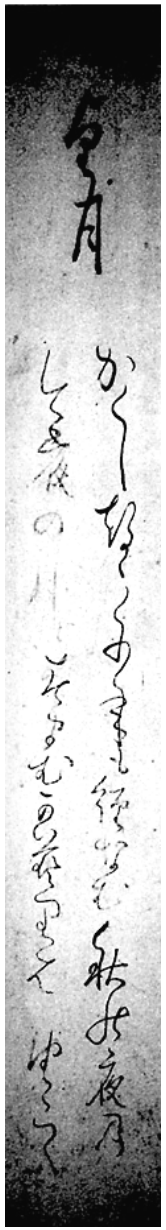


「八曲半双屏風」部分
良寛の里美術館蔵

雪能あ之當　江原の千世子
可毋東余李　止婆閑利盤消数
裳阿禮奈今朝の雪木毎能花登
君可見む賀耳　返し　言の葉能

由之宗匠の墓
奥に良寛の墓が見える。

望月　かくし都ゝ千年も経なむ秋能夜乃　今夜の月能春末む可藝里者　由之



由之の短冊 35.4×4.9
東北民藝館蔵

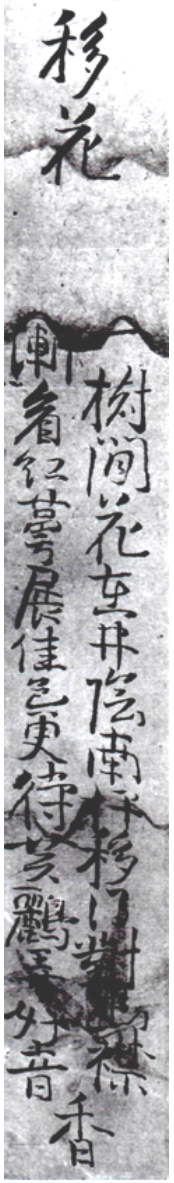
橘屋は、７００年つづく旧家であったらしいが、すでに以南の代には家運は傾いていた。

良寛の家族は、信仰心が篤く、実務より、文芸や学問に秀でた人が多かったが、現世に適応できない破滅型の人も多かったようである。兄弟４人は、皆、勉強家であった。

弟の宥澄（以南の三男）は、字は観山。観山房円澄。出雲崎の真言宗円明院の第10世を継ぎ、31歳で没した。

弟の香（以南の四男）は、幼くして京に上り、堂上家で和漢の学を修めた。詩歌に抜群に秀でたという。文章博士高辻家の儒官に抜擢され光格天皇と皇太子の侍講をつとめ、香という名を、賜ったといわれる。号は澹斎。

突然出家し、没年も確かではないが、寛政10年（１７９８）父の自殺から3年後、父と同じ桂川で投身自殺したと伝えられる。享年27歳？



香筆「七言詩」短

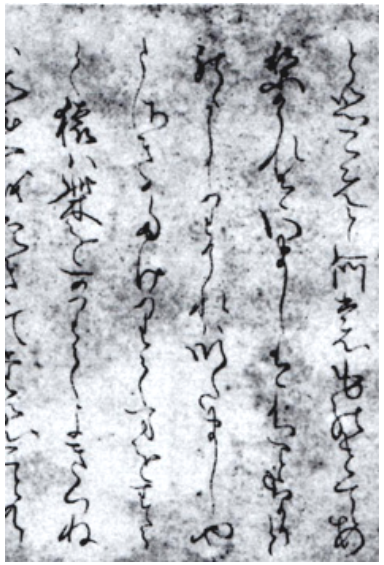
妹のむら子（以南の長女）は、寺泊の廻船問屋・外山茂右衛門に嫁いだ。良寛より2歳年下。歌をよくした。何かにつけ良寛の身の回りの世話をしていたという。晩年能登の瀧谷寺に閑居したともいわれている。文政7年（１８２４）65歳で亡くなった。

妹のたか子（以南の二女）は、出雲崎の町年寄高島伊八郎に嫁いだ。四男十女の子育てに追われ、歌は残さなかったようだ。二女のくまは寺に嫁ぎ、もう一人は尼僧になったという。文化9年（１８１２。）44歳で亡くなった

妹のみか子（以南の三女）は、出雲崎の真宗浄玄寺の智現上人に嫁いだ。後に妙現尼となる。歌人としても有名。７００首ほどの歌が残っている。嘉永5年（１８５２）75歳で亡くなった。

甥の山本左門・**馬之助**（由之の長男）は、良寛の甥で橘屋を継いだ。能筆家。父・由之と同じで、若い頃から手に負えない放蕩者。公私混同をくり返し、家財没収の上所払いとなり、一家は没落した。１８３１年没。享年43歳。

山本泰世（馬之助の長男）は、書の達人といわれる。良寛墓碑「良寛禅師墓」の揮毫者。１８６３年没。



山本泰世書「良寛の歌」巻子　部分

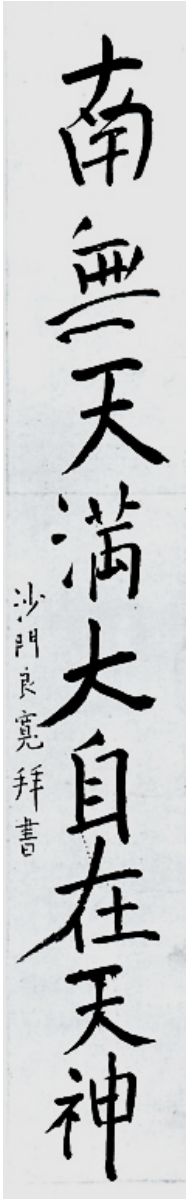
良寛の書　「狂」　革新的な精神　とらわれのない自由な精神

入門は御家流だと思われるが、父・以南に読み書きを習った良寛は、父の書風の影響を受けたようである。以南の書風は御家流とは異なり高雅であり、かなは秋萩帖風であった。13歳頃から6年間通った狭川塾では王羲之の行草書を学んだようだが、若いころの筆跡が残っていないので、本当の所は分からない。また、長い禅堂での修行のなかで見た経典の活字などから楷書を学んだと思われる。

日付のある真筆で最も若いものは、文化元年（１８０４）良寛47歳のものである。だから、良寛が五合庵に入ってから後、本格的な書の学習が始まったと考え、文化元年以降を三つの時期に区分するのが常識になっているらしい。一応、その常識に従って良寛の書の変遷を見ていこう。

五合庵時代　（文化元年～文化12年・１８０４～１８１５）良寛47歳～58歳
乙子神社時代（文化13年～文政８年・１８１６～１８２５）　59歳～68歳
島崎村時代　（文政９年～天保２年・１８２６～１８３１）　69歳～74歳

楷書



良寛「神号」
103.1×15.6㎝

良寛は、「九成宮醴泉銘」や褚遂良、張旭、王羲之、経典の活字などから楷書の基礎を学んだであろうが、「瘞鶴銘」や黄庭堅の楷書などからも影響を受けて、良寛調の楷書を創造したと思われる。それは、形を真似るのではなく、それらにある、おおらかで、温かく、純朴な、太古の人のこころのような純真さにあこがれたからだと思われる。

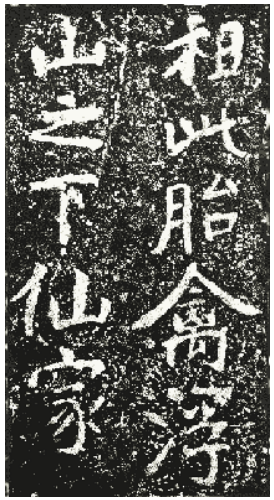
日本古代の「山ノ上碑」「船王後墓誌」「多胡碑」などには、良寛の楷書に近いものがある。良寛の楷書の源流は、日本古代の金石にある、という説もある。

良寛　「御水飯所」天保元年（1830）板　飯屋の看板刻字　幅約169㎝　新潟市歴史博物館蔵

よく考え抜かれた構成である。上下左右の余白はほぼ等間隔。各字の縦棒の長さやそり方に工夫が見られる。「御」の「卩」の第一画を長くかき、最終画を湾曲させて字形に丸味を持たせている。「水」の左側の「フ」を極端に小さくして不安定であるが、それと対照的に「飯」の「食」偏を細くして「台」を大きく書いて、２字でバランスをとっている。「所」は重心を上にあげることで、軽やかさを出している。

黄庭堅（1045～1105）「盧山七仏偈」部分　拓本　東京国立博物館蔵

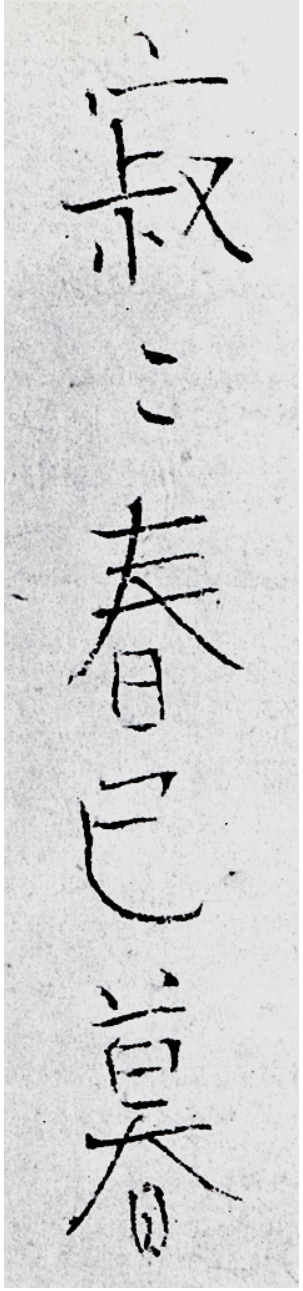
向勢で、懐の広い、ゆったりとした結構。



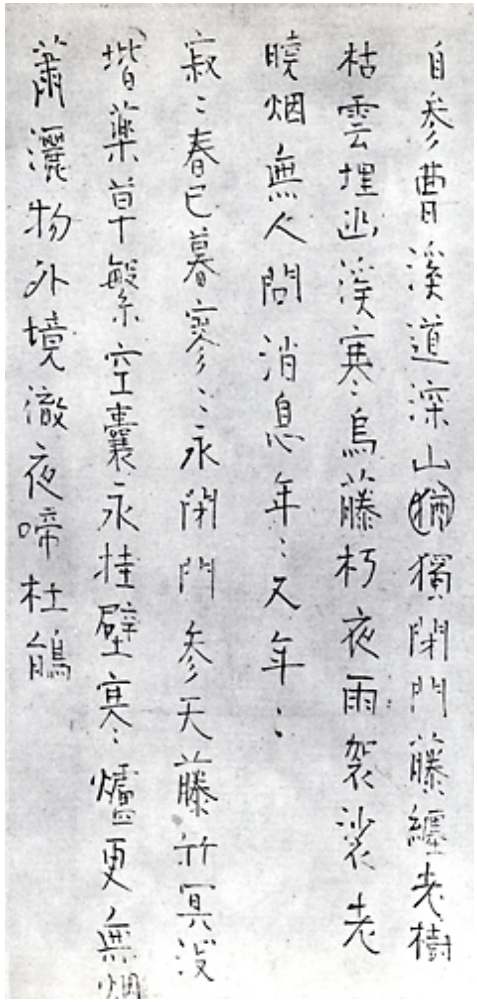
陶弘景「瘞鶴銘」拓本部分
南朝の梁　514年

篆意のある気宇壮大な大楷。純朴、温純。黄庭堅らに影響を与えた。

寥々として永く門を閉ざす。

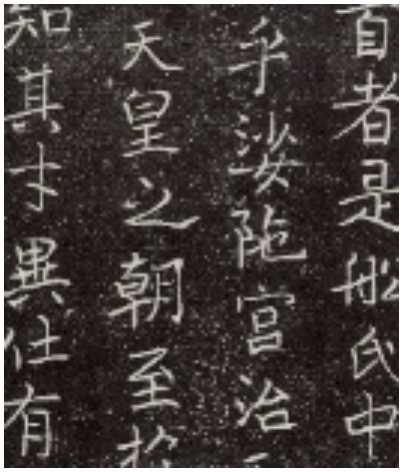


寂々として春すでに暮れ、



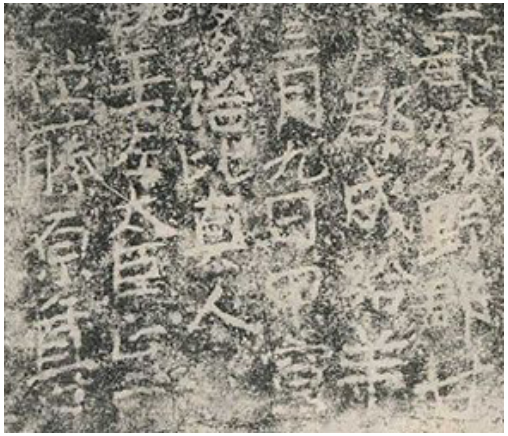
良寛「詩巻」天気稍和調　部分　楷書
紙本１巻　27.2×253.3㎝

自作の五言詩、36 首を清書したもの。新木家に伝来したもの。
鋒先を紙にひっかけるようにして切り込んでいる。細く鋭い線。はねがないか、小さい。良寛細楷の名品。気品がある。

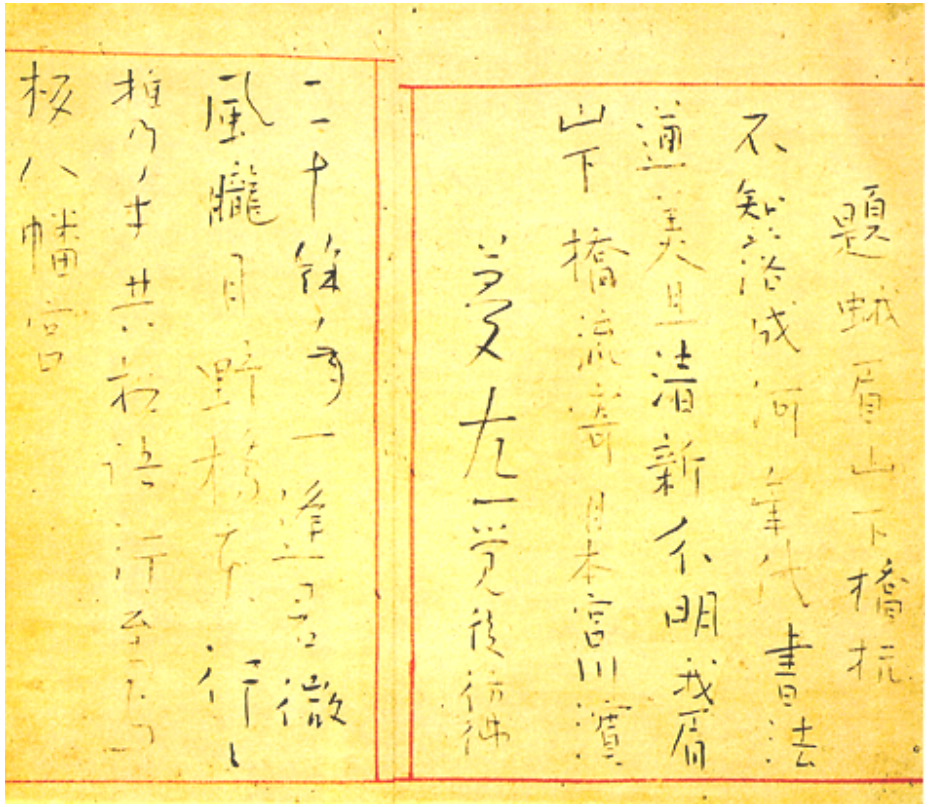


船王後墓誌　部分　668 年
船王後は、飛鳥時代の官人。
銅板に刻まれている。
大阪府柏原市国分松岡山から出土したらしいが不明。

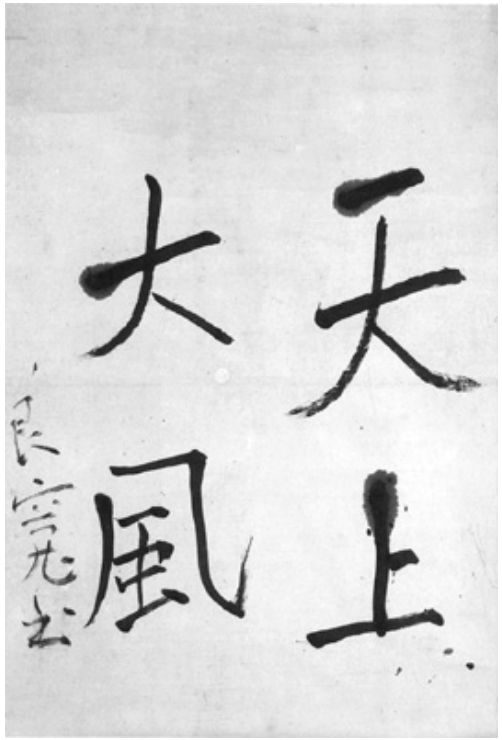
山ノ上碑　部分　681 年
「金井沢碑」「多胡碑」とともに「上野三碑」または「上毛三碑」と呼ばれている。群馬県高崎市山名町にある。



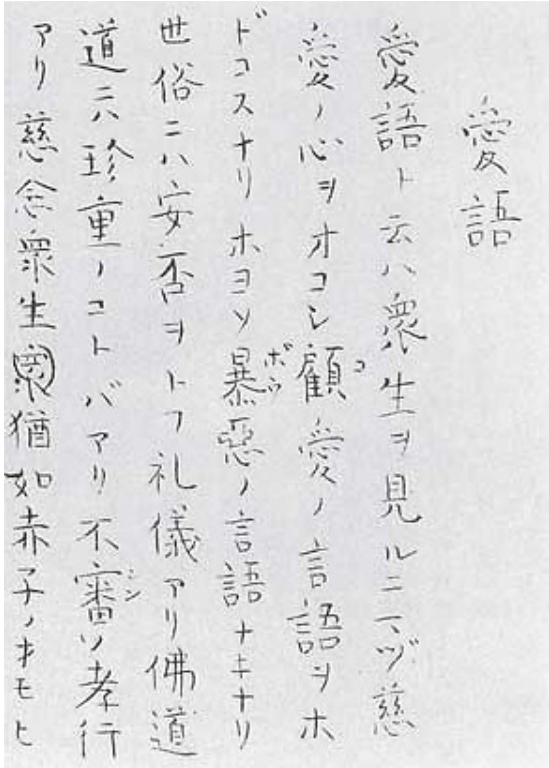
多胡碑　部分　711 年
群馬県高崎市吉井町池字御門にある。



良寛「題蛾眉山下橋杭」文政10年（1827）頃　紙本25.3×29.2㎝　朱罫のある紙に詩2首



良寛「天上大風」紙本　46.2×31.5㎝　凧文字



良寛「愛語」冒頭部分　23.5×50.5㎝　向勢であたたかい

蛾眉山下の橋杭に題す

知らず、落成は何れの年代ぞ。書法
遒美、且つ清新。分明なり、我眉
山下の橋、流れ寄る、日本宮川の浜。
　左一を夢み、覚めて後彷彿たり
二十余年、一たび君に逢う、微
風朧月、野橋の東。行々
手を携えて共に相語り、行きて与
板八幡宮に至る。

良寛が68歳の時、越後の宮川の浜に、四川省の峨眉山から六千キロの旅をして、3メートル以上ある橋杭らしい古材が漂着した。胴体に、楷書で「峨眉山下蕃」と刻されていた。良寛は、李白の「峨眉山月の歌」を思いつつこの詩を詠んだという。

1990年夏、この詩碑が峨眉山下の一角に日中の共同事業として建立され、2001年、この詩碑の近くに良寛小学校が出来たという。

行草がいくらかまじっている。

「天上大風」は、凧を作りたいという子どもに頼まれて書いたと伝えられているが、凧に使われた形跡はない。

良寛は生前から書の名手として知られ、いたる所で揮毫を求められたらしい。しかし、なかなか求めには応じなかったという。この凧文字も子どもを使って、良寛の書を大人が手に入れたのかもしれない。すでに、良寛在世中に偽筆が横行していたという。

「愛語」は、道元の『正法眼蔵』の「菩提薩埵四摂法」の中の一節を書いたもの。良寛の座右の銘である。『正法眼蔵』は良寛にとってバイブルのようなもの。その生き方に大きな影響を与えた。

「愛語ト云うハ衆生ヲ見ルニマヅ慈
愛ノ心ヲオコシ顧愛ノ言語ヲホ
ドコスナリ　ホヨソ暴悪ノ言語ナキナリ
世俗ニハ安否ヲトフ礼儀アリ佛道・・・
・・・愛語ハ愛心ヨリオコル、愛心ハ慈心
ヲ種子トセリ・・・」

「いかなるが苦しきものと問ふならば人をへだつる心と答へよ」良寛

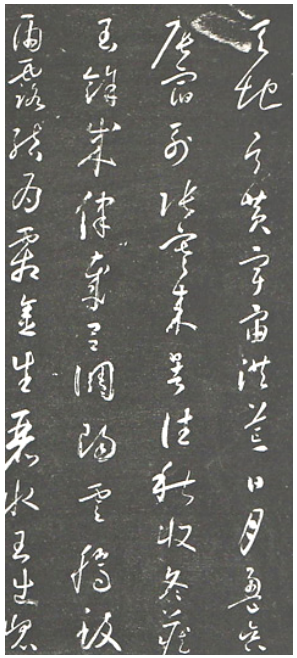
草書

良寛は、少年時代に王羲之の行草書を学んだようだが、その後、生涯にわたり、王羲之、張旭、孫過庭、懐素などを学んだようだ。

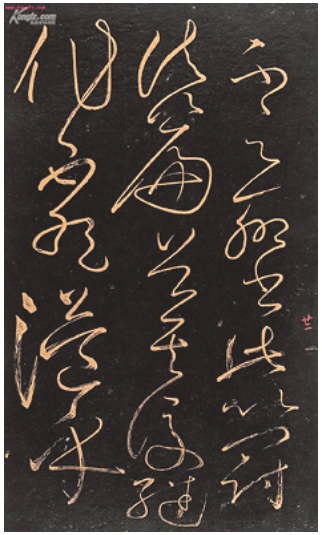
特に懐素の『自叙帖』や『草書千字文』を臨模したらしい。毎朝、懐素の「千字文」を空書きしたといわれる。

懐素の『自叙帖』は五合庵時代初期から学びはじめたらしい。法帖は中国渡来の名刻、『水鏡堂本自叙帖』（摹者は文徵明・文彭父子。刻者は章簡父）で学んだという。

乙子神社時代の文政3年頃（63歳）から良寛の草書は、「良寛調」といわれる自由奔放な草書になる。懐素の『草書千字文』を空書きで学んだ影響らしい。その章法が最も大きな影響を与えた、といわれる。

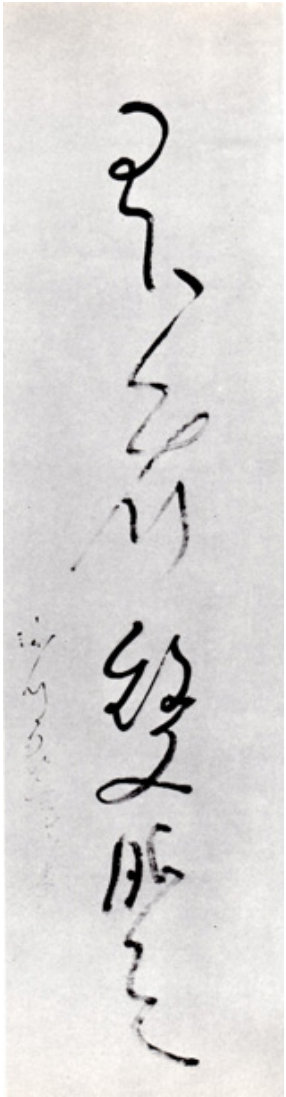


懐素「草書千字文」拓本　部分

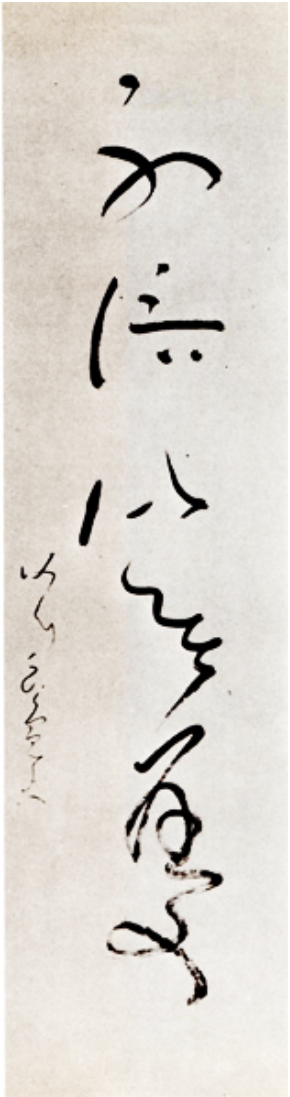


懐素「自叙帖」拓本　部分

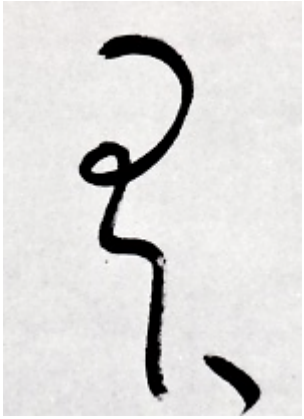
空中習字　（安田靫彦画）

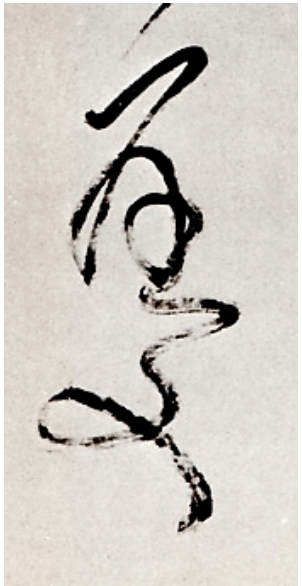


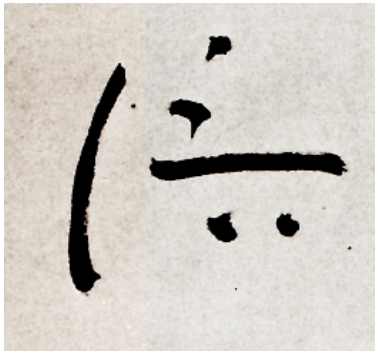
君看雙眼色　君看よ　双眼の色　沙門良寛書　101×26.6cm



不語似無憂　語らざるは憂い無きに似たり　沙門良寛書





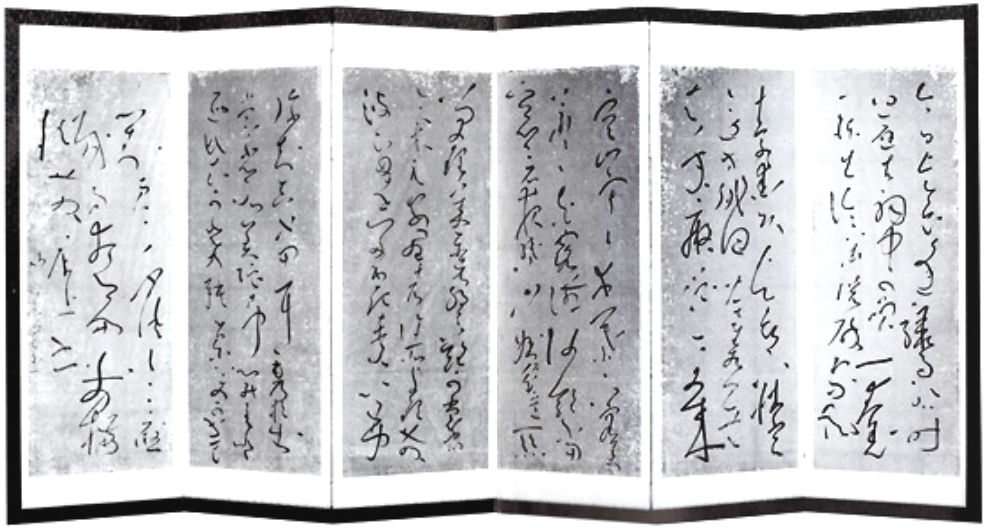


良寛書「双幅」

「多くを語らないからといって、あなたは私の両目に宿っている深い憂いの色を感じないのだろうか。」

お互いに語らなくても、気持が通じることを意味する言葉らしい。

良寛の草書作品には、叙情的で、独特のリズムとハーモニーがあり、**「目で見る音楽」**などと形容される。自然な潤渇の変化が美しい。細い線だが、確信に満ち、力が漲っている。自由そのものである。



良寛書「袖裏毬子直千金」六曲一双屏風　紙本　良寛の里美術館蔵

袖裏の毬子直千金、謂う言好手等匹無しと。箇註の意旨若し相問わば、一二三四五六七。

裙子は短く褊衫は長し　騰々兀々只麽に過ぐ。陌上の児童忽ち我を見　手を拍ち斉しく唱う放毬の歌。

大江茫々として春将に暮れんとし　楊花飄々として衲衣に点ず。一聲の漁歌杳靄の裏　無限の愁腸誰が為にか移さん。

余が家に竹林有り　冷(々)数千干(筍)は逆って全く道を遮り　梢は高くして半ば天を拂う。霜を経て精神を陪し　烟を隔て轉た幽閒。宜しく松柏の列に在るべし　那ぞ桃李の妍に比せん。竿直にして節弥高く　心虚にして根愈堅し。

愛する汝が貞清の質を　千秋希くは遷る莫れ。　良寛書

今日食を乞うて驟雨に逢い暫時回避す古祠の中。咲う可し一嚢と(與)一鉢と　生涯蕭灑たり破家の風。

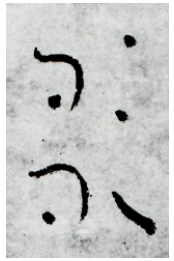
十字街頭食を乞い了り　八幡宮邊方に徘徊す。児童相見共に(相)(語)る去年の癡僧今又来たる。

空山寂々として木葉下り　客舎蕭々として白露滋し。沙鶏窓に当たりて竟夜織れども　貧道が為に一糸だに挂けず。

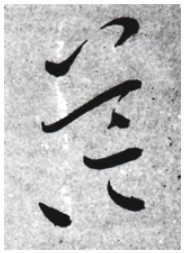
單理幾東者　野難可裳當氣毛安羅者許所　與理散波ら奴を多利起東所以布。

彌知眞當耳　毛乃那於裳悲所美陀布川能　毛登廼地(知)可悲乃鞅留尓萬可世天

君に對し君語らず　語らざれど意悠なる哉。雨は打つ簾前の梅帙は散ず床上の書。沙門良寛書



歌



春

晩年(70歳代)の作と思われる。良寛は、同じ詩を何点も書にしている。そのうちの一点。

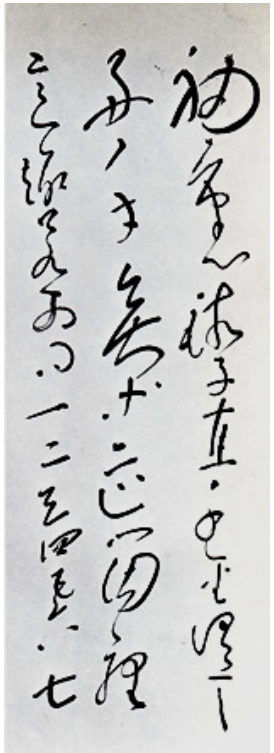
良寛の書には、気力が充実し、若々しく、生命感にあふれた独得のリズムとハーモニーがある。

懐素や張旭らの狂草や草書の影響で書かれてはいるが、良寛の豊かな感情と思想が、音楽のように、巧みな筆づかいで演奏され、造形されている。まさに、「目で見る音楽」である。

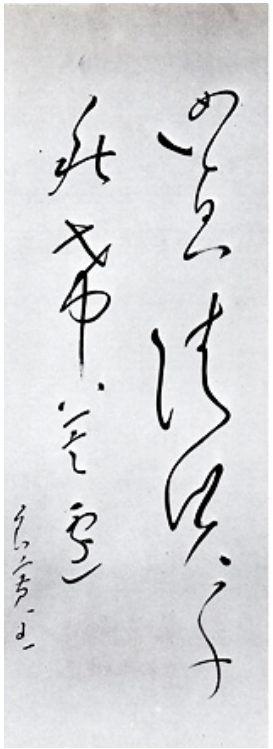
流れるような美しく繊細な線、激しく飛び跳ねるような線、行の変化の妙とバランス感覚。ゆったりとした書きぶりと大胆なデフォルメ。作品全体から発散される宇宙的なハーモニー。

良寛の草書は**「点の芸術」**と呼ばれるほど点だらけである。点が散りばめられている。点になってしまった漢字もある。

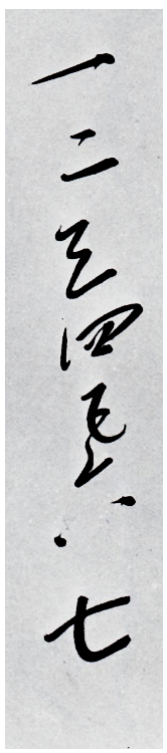
良寛の書は、日本の書の一つの到達点だと思われる。

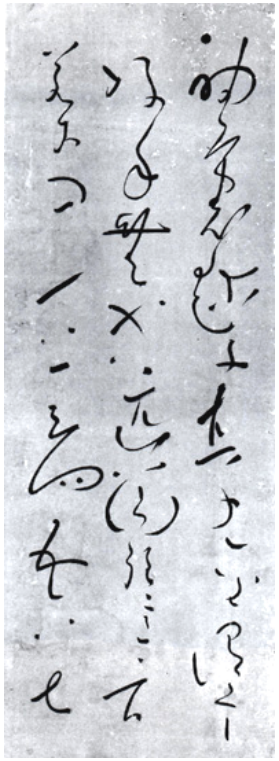


右隻第１扇　紙本 1827～1829 年

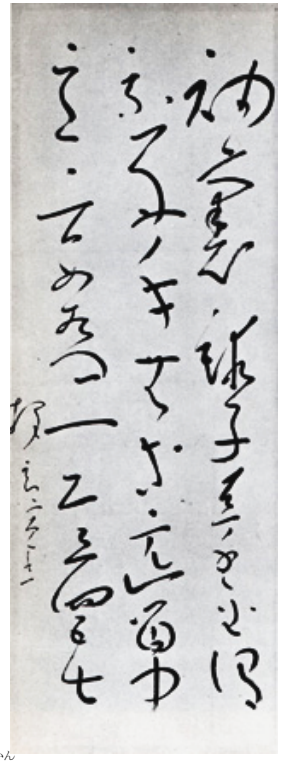


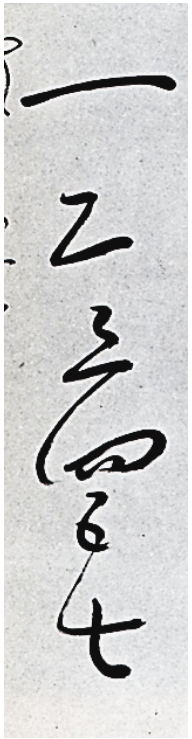
右隻第６扇　各扇　約 134×52 ㎝

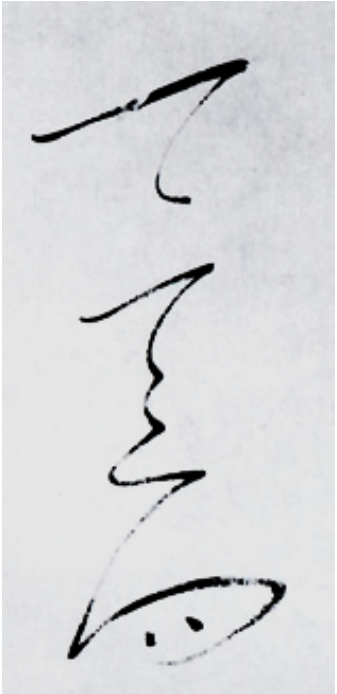




良寛の里美術館蔵　部分







良寛の里美術館蔵　下図の部分

北方文化博物館蔵（新潟市）部分

上図は、良寛書「袖裏毬子直千金」六曲一双　詩屏風部分　詩８首より。

袖裏毬子直千金　謂言
好手無等匹　箇裡
意趣若相問　一二三四五六七
（愛）　汝貞清質　千
秋　希　莫　遷　良寛書

これは70歳代の作品。

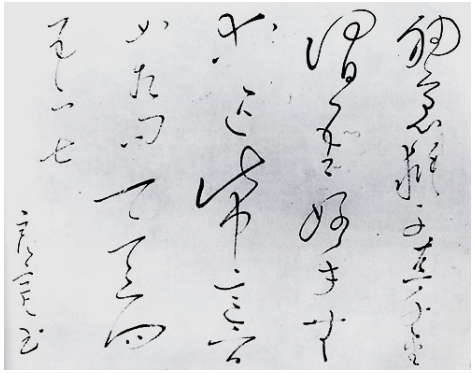
良寛の書は自由奔放である。あるがままの自己の感情や思想を表現するには、従来のあらゆる束縛から自由でなければならない。良寛は、自由な人間性を表現するために、常に新しい造形を探求して創意工夫をしている。

解良栄重著『良寛禅師奇話』第25段より
（良寛の嫌いなもの三つ）

書家ノ書
歌ヨミノ歌
題ヲ出シテ歌ヨミヲスル（歌会の題詠）
（又は料理人の料理）

『良寛禅師奇話』には58編のエピソードが書かれている。

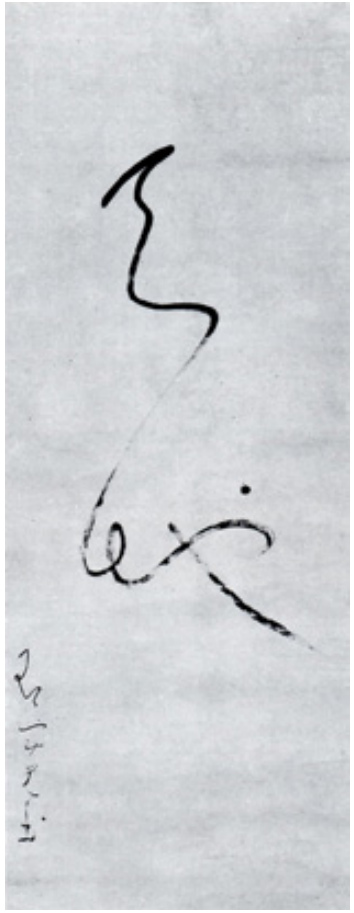
「師ニ書ヲ求ムレバ、手習シテ手ガヨクナリテ後書ント云フ。其時アリテ興ニ乗ジ、数巾ヲ掃フコトモアリ。敢テ筆硯ト紙墨ノ精粗ヲ云ハズ、自ラノ詩歌ヲ暗記シテ書ス。故ニ字脱シ、又、大同小異アリテ、詩歌一定ナラズ」（第13段）



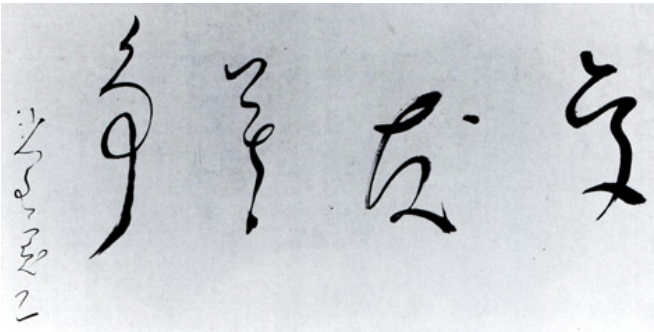
七言絶句「袖裏毬子直千金」40×50.8 ㎝
良寛の里美術館蔵

良寛書　貼り交ぜ屏風　木村家蔵

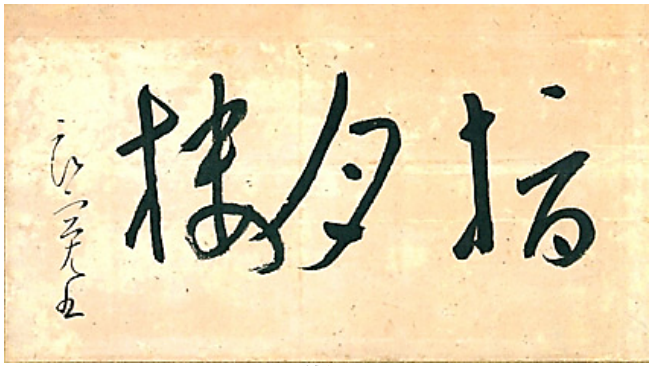
良寛書「心月輪」鍋蓋刻字　径 42.3 ㎝
最晩年の作？
「心は月のように円く清らかに」



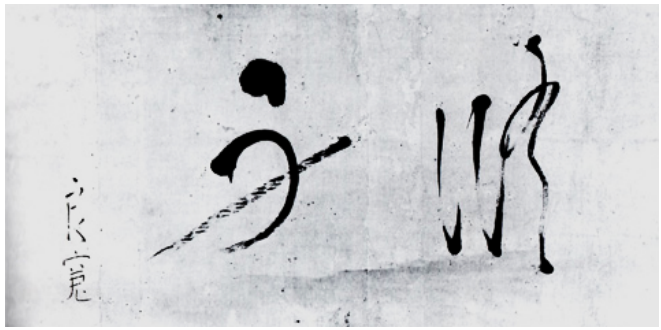
良寛書「天地」111.0×39.8 ㎝
　勢いのある、あたたかく強い線。「地」の点が全体を引き締めている。



良寛書　「交友莫争」沙門良寛　26.0×51.5 ㎝　良寛の里美術館蔵
　友と交わりて争うことなかれ



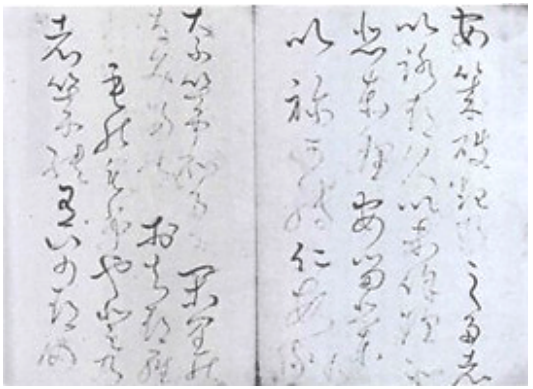
良寛書「指月楼」扁額　桑原祐雪に書き与えたもの。
良寛の里美術館蔵



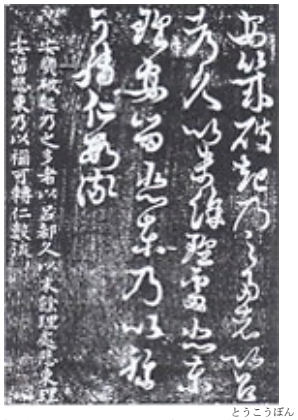
良寛書「修身」　額字　26.5×54.3 ㎝
「身」の最終画に畳の目がうつっている。

かな

良寛は、草かなを、彼が40歳頃に刊行された『秋萩帖』（木版本）で学んだといわれるが、幼少の頃から父以南に秋萩帖風のかなを習っていたと思われる。以南は秋萩帖風のかなをどんな手本で学んだのであろうか。また、残されている良寛の臨書をみると墨法などが真蹟に近いところから、もう少し真蹟に近い他の版本でも学んでいたと思われる。

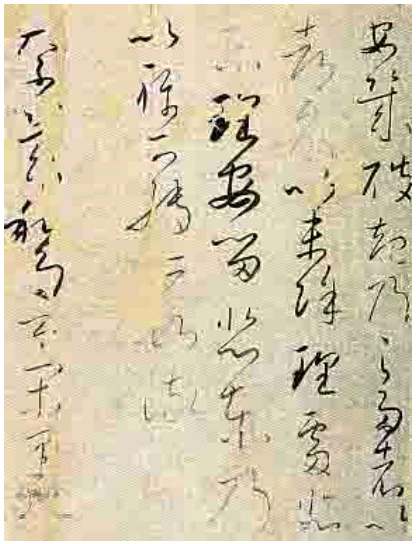


良寛臨書「秋萩帖」冒頭部



良寛が臨書した摸刻本（東江本）

真蹟から最も遠い版本だった。

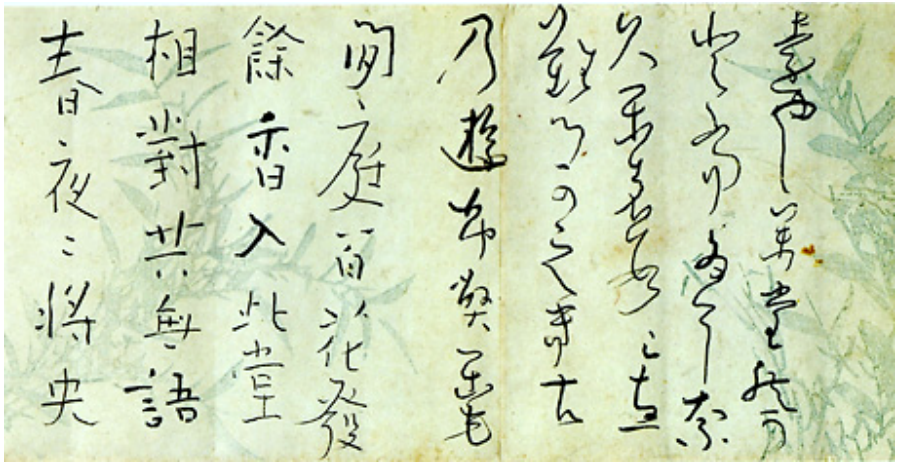


「秋萩帖」真跡　冒頭部　　東博蔵

『秋萩帖』三宅正誼識語本 1752 年

真蹟に近い版本

良寛は、和様の草がなである「秋萩帖」から古代日本の美意識を学んだ。彼は万葉調の歌人と言われる。「秋萩帖」は万葉仮名で書かれている。彼は、この万葉仮名に、和歌の調べと通じるリズムを発見したともいわれている。彼は素朴でおおらかなものを愛した。やがて、彼は、乙子期に「秋萩帖」を超え、和風と中国風が一体となった「良寛調」の書を創り出してゆく。



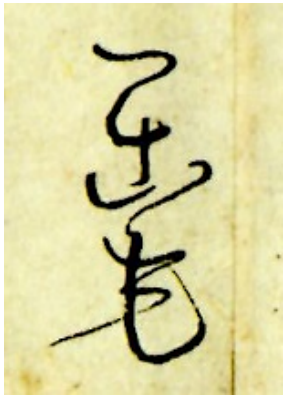
良寛書「和歌並五言詩」書巻部分　紙本 16.4×33.3 ㎝　島崎村時代の作品と推定（70 歳前後）

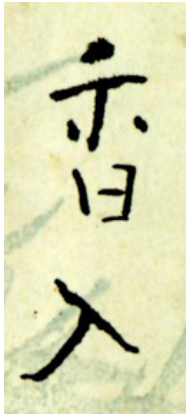
遠也萬堂能　可
登當のた爲耳　奈
久閑者數　己惠
難川可之幾　古
乃遊布弊閑毛

小山田の門田の田居に
鳴く蛙声なつかしき
この夕かも

閒庭百花發
餘香入此堂
相對共無言
春夜々將央

閒庭　百花発き
余香　此堂に入る
相対して共に語無く
春夜　夜将に央ならんとす





阿部家特製の料紙（木版で竹を藍刷りしてある）に和歌と漢詩が書かれている。阿部定珍のために書かれたか。定珍と良寛が酒を酌みかわしながら歌や詩を詠んでいる。

おおらかなかな。直筆で書かれている。滲みの多い叙情と余韻。強い線。

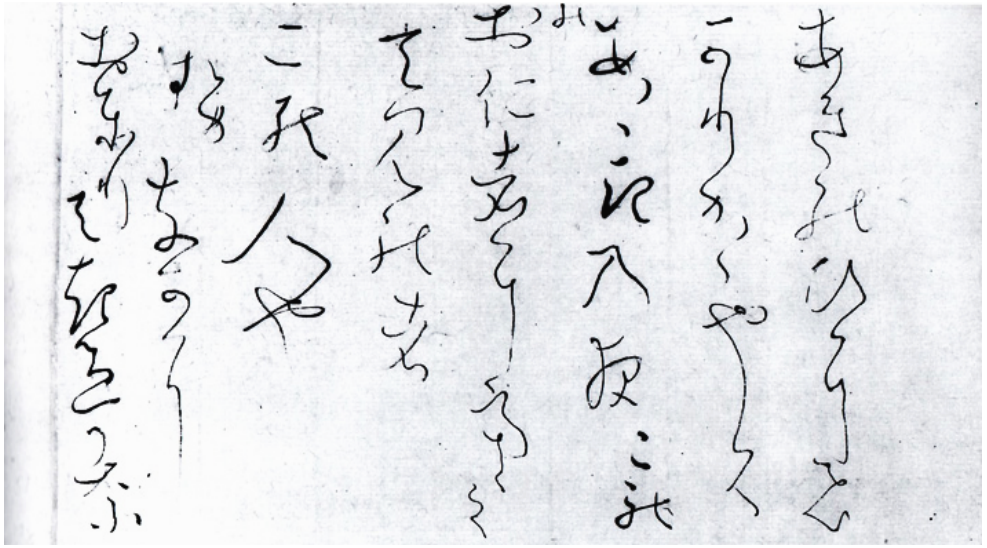
良寛書「長歌」34.0×20.0㎝　乙子神社時代の作

紅葉刷りの料紙に紅葉の長歌が書かれている。良寛の庇護者、渡部村の庄屋阿部定珍と二人で紅葉の歌を詠み合った時の作品。上品でリズミカルで軽やかな書きぶり。

閑奈堂耳者　毛美知遠可女
爾散之　己那堂爾波　毛美
知遠　可美爾敷理　裳美知能
有堂遠　餘美安布天　安幾能
奈己理者　古能也東耳勢武
かなたには　紅葉をかめにさし
こなたには　紅葉を紙に刷り
紅葉の歌を　よみあふて
秋のなごりは　この宿にせむ

知遠

あき能



良寛書「和歌・俳句」15.1×27.7㎝　島崎村時代（文政12年頃）東京国立博物館蔵

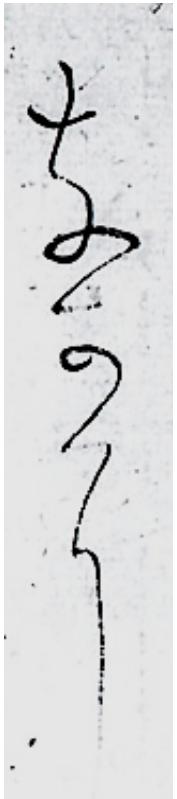
安幾能比耳　飛
可利加々也久
數々起乃報　己禮
能於仁者耳　當々之
天見禮者

秋の日に光りかがやく
すすきの穂
これのお庭に立たして
見れば

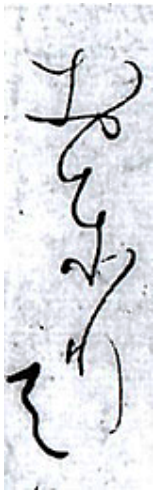
己能人也
勢奈可耳
於東利　天起留可奈

この人や背中に踊りで
きるかな

上の作品は、良寛最晩年の「良寛調」のかな作品。優美で気品がある、大らかで躍動的。各行の響き合いと全体の調和。



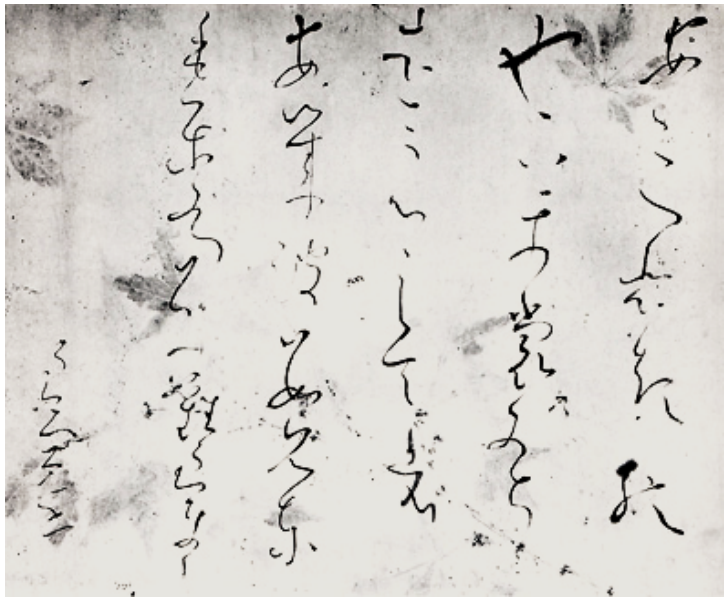
なかに（リズミカルな横線のくりかえし）



おどり（躍動的なかきぶり）

人や（弾む書きぶり）

乃（の）線のゆらぎ



良寛書「和歌」26.5×32.6㎝　島崎村時代を代表する作品

紅葉刷りの料紙に紅葉の歌を書いたもの。この料紙は、紅葉に薄紅色の顔料をつけ、紙に押しつけたものらしい。

上の作品は、この美しい料紙を見た良寛が、その時の感動を詠み、書いたものという。最晩年、良寛の筆法は、直筆から側筆へと変化している。

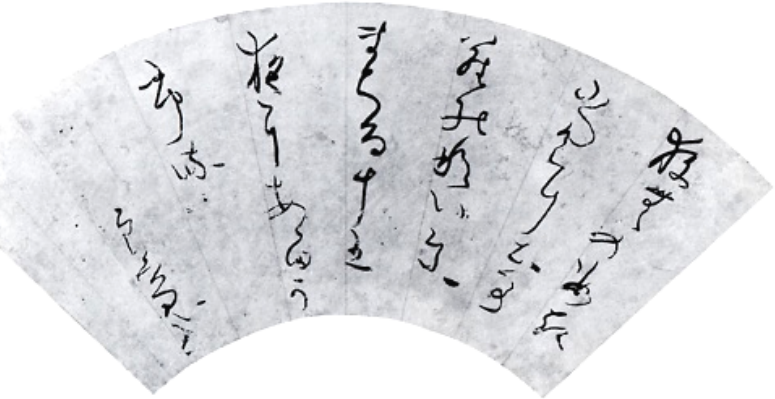
安之

安之悲起能
也萬（乃）裳美知
遠　宇川之天者
安幾波數久東
毛　閑當美難良末之

良寛書

あしひきの山の紅葉をうつしては
秋は過ぐとも形見ならまし

也萬

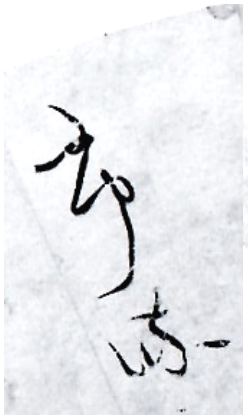


良寛書　「俗謡」扇面 16.2×45.0㎝　良寛の里美術館蔵

当時、唄われていた盆踊唄を書いたものらしい。食べる物のない農民たちの餓えた現実が唄われている。しかし、書は大らかで堂々としている。

報無の數起
當耳ち可
羅能那い爾
まちる十五
夜耳あ面可
布流

良寛書



盆の過ぎたに力の
無いに　待ちる十
五夜に雨が降る

良寛書

世能中耳　末之良奴東
爾者　安羅禰止毛　悲登利
安處非曾　和禮ハ　末左禮留

世の中にまじらぬとにはあらねども
一人あそびぞわれはまされる